

五段目〔昭和四年二月歌舞伎座所演〕

田村西尾

〈出典：「演芸画報」昭和4年3月号〉

幕が明くと、最^もう稲^{いな}叢^{むら}の中へ、定九郎が入った事に成っていて、例の傘が打棄ててある。雨の音で新十郎の与一兵衛が出て来るが、この人には老実味が無かった。花道の殆^{ほと}んど真中で、後を見返った注意など、何^どうしても博奕場からの戻り道、後から誰か追いかけて来て、少し貸せと言われやせぬかという形である。あの場合後に注意をするのはよいとして、見込むような形をするのは悪いと思う。一癖ありげな新十郎の眼は、いわゆる与一兵衛らしい眼として受け取れなかった。

稲叢の前で財布を頂くと、中から羽左衛門の定九郎の真白な手がヌツト現われる。定九郎が刃を与一兵衛の脇腹に刺して出て来た形は如何にも水際立っていた。

羽左衛門に部屋で会ったら、何^どうも定九郎を余り真白に塗り過ぎると思います。蠟細工のようで面白くないので、私は白粉を少し薄目につけました。その方が宜^よいと思うし、私は青髭をつけません。朱鞆で無く、黒鞆^{だんじゅうろう}は九代目を学んだのです——と言った。

成程白粉は少し薄目であった。併^{しか}し青髭のあった方が芝居らしくて宜^よくは無いか。黒鞆は団十郎を学んだにもせよ、あの情景の淋しい中に、定九郎の差す朱鞆のみが、紅一点という趣きがあるのだから、色の配合上、朱鞆の方が、見た眼が派手になりはしないだろうか。

その時、更に羽左は言った。財布の中で金の員教を調べるのは私は如何と思う。封印を切って一々調べた小判包みが、六段目で又包まれて勘平から出される、どうも合点が行かない。併^{しか}し財布の中で勘定をする方が派手になるから左^さ様はしているものの、理屈に合わないと言ったのは、尤もなことである。

羽左衛門は定九郎は私に言わせると、大野郡次郎の方の定九郎らしく見える。頗^{すこぶ}る色気があるからだ。小判調べの間に、足へ蚊が来るのを片足で払うようなこともしなかったし。勘平が財布を持ち去ろうとすると、その紐が首へかかっているので、定九郎の首が起上がるのは不愉快で滑稽だと思ったが、今度はさすがに、そんな小刀細工は無かった。

菊五郎の勘平は、出て来て、七三で一発、台尻をその反動でグイと引いたのは、鉄砲の心得ある優として、行届いているなど思った。松の立木が、いつもの位置より、少々前へ出てはいないかしら、何^んだか邪魔になるような気がして成らぬ。暗きに行くという様子が、足取りによって如何にもうまい。綱をかけて定九郎の足が持上がるころなど、誰でも驚く様子をするので、見物が笑うが、菊五郎の勘平は、ハツとした様子だけで、心持の芝居をしていた。

懐中の財布の金に驚き、逃げ出す様子、引返して財布ぐるみ手にして懐中に納め、舞台をよろめきながら、花道に來り、夢中で引込むまで片唾を呑んで見物させられた。

四^し逐^{とろ}感^{かん}になって揚幕へ入る足取りなどというものは、至芸というべきである。

六段目〔昭和四年二月歌舞伎座所演〕

本山萩舟

〈出典：「演芸画報」昭和4年3月号〉

時蔵のお軽を除くと、全然音羽屋一家の六段目である。若しも栄三郎が生きていたら、当然このお軽を勤めるから、それこそ本統の水入らずでできるといって、ほろりとしたものがあるそうである。栄三郎の最後の役が、このお軽であっただけに、思い出の深い六段目でもある。

一体今度の『忠臣蔵』は、羽左衛門と菊五郎とで、全責任を分担したという。この六段目などは、むろん菊五郎の持場だから、菊五郎一人で責任をもち、すべての指揮をしたものと思われる。『行儀のいい忠臣蔵』とわたしはいった。その行儀のよさの大部分は、菊五郎の率領によるようである。

多賀之丞のお才と、伊三郎の源六とが出て来る。上手の莫産へ行くまでに、ほこりを厭うような当込みをしない。多賀之丞も伊三郎も、はまった役でなかなかいい。どっちも気を入れてして、演過ぎぬところがいい」。いさこさが済んで安心というところも、『大安心だ』とだけで、人数をかぞえて『五安心』などという駄洒落もない。引込みに『駕屋、気をつけてやつてくれ、頼むよ』とばかりで、『振つちやいけねえ』などの下司な当自もいわない。そんなことで当込まなくては、儲からないと思っているような役者だと、これ等を封じてしまわれた日には、白湯を呑むようになってしまうものだが、それでいて相応に味を失わないところが、やはり年期の入っている証拠である。ただテレ隠しに『お暑いことございましょう』と、扇子をバタバタやった時、観客がじわじわと来たのは、役者のせいではなくて陽気のせいだ。

時蔵のお軽は、近頃世話女房振りのぐっと上った人で、輪郭のまだ乏しいのはぜひもないが、することは行届いていい味もある。そして大体神妙にむしろ、内輪にしていたが、『こちの人さらばござんす』に、哀れさと色気とが見え、『お軽待て』と呼ばれて、『あい』と駈戻るイキがもっともよかった。

菊三郎のおかやも人柄がよすぎる位で、この六段目にはぴたりとはまった。与一兵衛の死骸を持込まれて、杣を相手にぐすぐずいわず、直ぐに死骸を見に行くすなおさで、ことによると勘平を、打擲なんかしないのではないかとまで思われたが、勤めるところはちゃんと勤めて、折檻にも涙がこもっていた。悪く達者にやられると、気の毒な婆さんに対して、かえって反感さえ起こりたがるものだが、そうならぬところにこの人の身上がある。

菊五郎の勘平は、格を守ることに於いて、こまかい仕事を目立たぬようじっと、静めて手順よく運ぶことに於いて、今での勘平役者として、定評のある役である。

格を守るということ、一線一画をも苟しくもしないということ、もしもそれに囚われると、コチコチになってしまうわけだが、そこは多分に才気のある菊五郎である。守るとい

う格と、苟しくもしないという線とは、角々のきまりどころで、大綱を破らぬ範囲内においては、自分の理智の命ずるままに、いろいろの新手を試みて、うまくそれが成功した場合には、新たなる格、新たなる線として主張する人である。

若し不成功だった場合には、その時は剛情に強弁したり、顧みて他をいったりするが、いつの間にかもとの格にこもって、しばらくしてからまた這出して新手を試みる。決して沈滞し凝結しないところに、この人の眠らぬ生命が認められるのだが、同時にこの大きな活力の中に、数知れぬ小さな不出来しが、犠牲になるのはやむをえないとして、すでにある人からも『理智劇』といわれた。持前の聡明から来るこの理賀、大切の宝にはちがいないけれど、^{たの}待みすぎると^{ひとり}独よがりになって、かえって害になることを忘れてはならぬ。長所が即ち短所というのは、ここである。

わたし達の観たのは二日目であったが、二日目はもっとも役者にとって、芝居の演難い日だそうである。花道の出などさりとして、いかにも無造作に帰って来るように見せている。写実を宗とするこの人の常用手段だが、写実ならむしろこの場合の勘平として、そう無造作には出られないはずだともいえるけれど、それでは変痴気論になる。仕事は後を見てくれで、しばらく観客を助けるものと解していい。

『狩人の女房が、お駕でもあるまい』なども、随って軽くあっさりと済ませ、雷雨や雨漏の^{すてざりふ}捨白も、なめらかにすらすらと出る。紋服に着替えるところは、いつもの通りだが、落した財布を取りあげるところで『何でもござりませぬ』というだけ、おかやにも空笑いをさせぬのが、やはり行儀のよさの一部であろう。

今までといき方の変っているように見えたのは、おオの話には空耳を馳せながら、じつと財布に目をつけて、思わず煙管を落とす^{しぐさ}料で、いい味だと思ったが直ぐまた後から『寸違わぬ糸入縞』で、もう一度煙管を落とすので重複した。

^{おやじ}親父さまに会ったとばかりでみんな安心してしまっ、肝心のお軽に『行かずばなるまい』を、いわなかったように思ったのは、わたしの聞き落としだったろうか。そうだとすれば赤面ものだが、もしそうでなかったとすれば、これは大事な手ぬかりである。

『こちらの人、わたしやもう行きますぞえ』というお軽の^{せりふ}白が、丁寧すぎたせいもあるだろうが、顔をそむけて避ける態度が、何だかよそよそしいようで、夫婦の情愛が薄く見えた。もっとも次の『お軽待て』で、一度に取り返すつもりだというなら、いささかずるいやり方である。

おかやと二人の舞台になって、みずから莫産の始末をしたなどは、飛んだ仁左衛門かぶれの気味だ。大道具が気を利かしたつもりで、^{うすべり}薄縁の下に入れて置いた蒲団が、合せ目からハミ出したとって、邪慳に引摺り出したのは、むろん当夜だけの失態だが、『おれは何も寒がってなぞいやしない』ということ、いかにも断っているようで、やはり一種の銜気を見られたのは気の毒だ。

切腹は前に判官で、ぐっと締めてしたあとだから、この人としてはむしろ派手な方である。それで気がさすかして、頬ぺたにつける手形など、何だか遠慮しているように見えた。

二人侍にささえられて、『どれ』と死骸を見に立った時、膝がまくれ過ぎたのを、羽左衛門が側から隠してやると、今度引返して来た時、それでは演勝手が悪いと見えて、自分でまたすこしはだけると、羽左衛門がまた隠してやっていた。羽左衛門としては、むしろ親切のつもりだろうが、こういったところにも、二人の芸風の相違があるらしい。

彦三郎の数右衛門は立派だ。羽左衛門の弥五郎は御馳走だ。御馳走だけにややぞんざいな点も見えたが、この人がつき合うので、芝居がやはり大きくなったことは争われぬ。照蔵、鯉三郎、羽太蔵の袖も、悪巫山戯をせずに行儀のいいことだった。